之を要するに、凡そ一施設の價値は、其存する所、物にあらずして實に之を運轉する人にあり。尋常科准教員の資格より有せざる者に向つて、保育法の改良を叫び幼稚園の効果を望む。不當之より甚しきはなし。吾人は現今我國に於て幼稚園を以て、純然たる教育系統の中に加へながら、何故に之を改良發達せしむる方法を講ぜざるか、何故に之を運轉する保育者養成の法を奬勵せざるかを怪しむものなり。（完）

寄書

題賞文掲載のため、他の玉稿は總べて次號に讓り候。

懸賞文の集まりたる數比較的に少かりしは遺憾に候。萩子君のは選を望まずとの事故、等外と致し候。

幼時の家庭（等外）

東京　萩子

わゝ幼時の家庭、此五文字はいかにたのしき記憶を私の心から呼び起しましたでせうか。いかにかなしき記憶がうかび出たでありませうか。其當時小さい胸にきざまれたさま〴〵の印象、今は心

の底に沈んで居つたそれが、追懐といふもしろいはたらきの爲に、さながら昔に歸つたやうにあり〳〵と出てまゐりました。

私の生れましたのは、父母兄二人が健全で、一家擧て故郷を遠く去つて、他國に暮して居つた時の事で、一家團欒の樂しい中に生れ出ました。男二人の次の女といふので、たれからも珍らしがられ可愛がられたといふ話で、其時丁度九洲に出征して戰つて居つた私の父は、私が生れたといふ知らせを得て、戰爭で氣の立つて居る折柄とて「女であるとか女ならばいらぬ」など、書いてよこしました。そうしてその戰もやんで歸つたところがいらぬどころか、はじめての女兒といふので大喜で愛したといふ事を、いつも母が話しては笑ふのでございます。さて、私の二才の時に一家は故郷に歸りまして庭園の廣い靜かな家に住みはじめました。此家には池も畑も大木も花咲く草も果物のなる木も野菜も、いろ〳〵ありまして、從て虫も來れば鳥も來る、其上に犬が飼つてあるといふので、つまり私の周圍には、自然の動植物が多くございました。父も母も植物培養が大好で父が夕方に鍬をとれば母は花壇の手入をするといふ有樣で、私共兄妹も、しらず〳〵植物に親みて之を愛護するといふ心情が養はれましたので此廣い庭は實に親子五人の樂園で、三人の子供は友達をさそひこんで、多勢で勝手に飛んだりはねたり草木を植ゑたり花をとつたり眞に樂しくあそびました。私は今も誠に花好で庭の片隅の雜草の花までもいひしらぬ美感を惹起しますが、此植物に對する愛は全く此庭の賜でございます。わゝたのしかりし

此家此庭は今は山川百里のあなたにあります。

さて七才の時に又もや一家擧て他國に出かけました。其道中のたのしさは今でもあり〳〵と思ひ出せる位で、多くの故郷の人に送られ、人力車に乘り、滊船に乘り、滊車に乘り、旅館にやどり、他國に住ふなどゝいふ變化は、小さい私をよほど喜ばせたと見えます。さうして私の家が二度も他國に出かけました爲に、其頃としては割合に多く旅行をし、從て家の内でも諸地方の話がはづむといメやうな事から、知らぬ處を見たいといふ好奇心を惹起したと見えまして、私は小さい時から旅行好で、今でも一年に一度はぜひ旅行せずに居られぬほど旅行を好みますが、其原因は幾分か幼時の旅行にあるかもしれません。

其土地に居る三年の間に、私に弟ができました。

一家は父母兄二人私弟と六人になりまして、賑かさたのしさは增すばかりで、まだ小さい私が弟を抱かせてとせがめば、父が又母の膝から我季の子を抱きとるといふ始末で、此弟を中心として一家は實に春でございました。實に私は此頃まで世の中の悲、さみしさといふやうな事はすこしも知らず、まるで春の花に醉うて居る蝶のやうに成長してまゐりました。

ところが老少不定の世の中とはいひながら、此一家を賑はして居つた我弟の命はあまりに短くて、生後二ヶ月もたゝぬうちに急に病を得て亡くなりました。さあ其時の父母の悲、實に私は小さいながらに死といふものはいやなものである、自分は死にたくないとつよく感じまして、死といふものに對する感情、一家に人の死んだあとの有樣

をはじめて經驗いたしました。

弟の死が一家を急にさみしくしたのについゞいて其の翌く年一家が又故郷に歸るとすぐ此親子團欒の中心である、我一家の柱である我父はかなしくも十六才を頭に三人の子を殘して歸らぬ人となりました。其時の母のなげき、私共兄妹三人のかなしみ之はとても筆につくすことができません。其時私は九才でございましたが、かやうに死の冷たい手が最も幼い我弟最も大事の我父をさそひまして、四人の母子を殘した其あとの家庭といふものは、それは弟の死以前と比べることのできない、さみしいもので、つゞいて母が病氣をする、兄がわづらふといふので、私は實に悲哀心配といふ點で大打撃を蒙りました。私がある年齢までは、いはゞ悲觀的の人間であつた事、病といへばすぐ死を連想してどうか母は死なゝいやうにとたえず小さい胸をなやました事などは此父の死といふことが原因となつてをります、但し亡くなつた父の子たるにはぢぬやうに、父なくして育つる母に心配をかけぬやうに、良い人になりたいといふ希望決心は父の死當時母の教訓に由て深く私の胸にさざまれましたそうして、大きくなるまで此希望と決心は私を支配いたしました。

父の死後、母兄の病氣もよくなる頃、やつと一家は落付きまして、土地は靜かなところ、家は前にも住んだ庭の廣い家ですから、母は前にも增した植物好になる、一人の兄は非常に動物が好で犬を飼ふ、雞を飼ふ、蚕を飼ふ、兎を飼ふ、といふので、私は通學の餘暇にいつも之等の世話役で、ます〳〵動植物に親しくなる。其上に隣家に私を

非常に愛してくれる一人の婦人がありまして、此人は山とか川とか月とか凡て自然の景色に對して趣味を持て居るので、其感化をうけて、私は自然の景色を愛する情が大變養はれました。こういふ風に私が天然を深く愛するやうになりましたのは實に幸福であると思ひます。

それからもう一は私は極小さい時から書を讀むといふ事が大好で、十才から新聞の拾ひ讀をしました。いろ〳〵の雜誌も讀みはじめました。高等小學時代には新聞狂雜誌狂と言はれました。今でも讀書が私の一の大きな樂になりますのは此影響がよほどでございませう。

たのしかりし、かなしかりし私の幼時此邊で筆をおきませう。

幼時の家庭（一等）

東京　友彦

黄ばむだ木の葉がひら〳〵と舞ひ落ちて、夕風が冷やりと身に浸む頃になると、どれ程の樂しさに氣を奪はれて居ても、私は忽ち二十年前の昔に歸つて、丁度今頃であつたあの晩の、凄い〳〵恐ろしかつた、悲しい記憶を呼び起さずには居られませぬ。集散離合は定なく、さても一時は分限といはれた私の一家も、分散といふ浮世の風の吹き舞はしに母先づ去つて父後に逝き、家を繼いだ一番の兄もすぐ兩親の後を追つてからが、後は丸でちり〳〵ばら〳〵私は先づ他家へ貰はれて行く、私の姉……懷かしい私の姉は……左樣私よりは丁度八つの年上で、其時は丁度十九であつたのが、親類の叔母の家に行て、厄介になると云ふ悲慘の有樣。嗚